2026年5月24日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

ザンビア
伊豫谷香南子さん(36)
呉市出身

ろう学校で発見の日々

アフリカ南部の内陸国、ザンビアの首都ルサカにある、ろう学校で活動している。体育や情操教育の機会が限られる中、レクリエーションを通し、子どもたちが体を動かし、人と関わる機会をつくるべく、現在は週に1度、エアロビクスのレッスンを行っている。

音楽に合わせて体を動かすのだが、不思議なことに言葉や手話の壁をほとんど感じない。私自身、当初は英語も現地で使われる米国手話も十分ではなかった。

日本では、ろう者と関わる機会がほとんどなかった。ここでの活動に自信が持てなかったが、子どもたちの前に立って動きの見本を見せると、彼らが列になってまねをし、自然と一体感が生まれていく。

耳が聞こえない子どもたちも、床から伝わる振動や視覚的な合図を頼りにリズムを感じ取り、生き生きと体を動かす。その姿を見て「できない」と決めつけていた自分に気づかされた。

日々、新たな学びや発見を重ね、少しずつ活動の手応えを感じている。

ザンビアでは、アジア人や女性であることから、差別的な言葉を受けることもある。日本で「マイノリティー」として生きる実感が薄かった私にとって戸惑いの連続だった。

だが、学校の子どもや先生たちはとても温かい。言葉や手話が拙い私に対しても、表情や雑談を交えながら丁寧に関わってくれる。自分とは違う立場の相手に寄り添う姿勢を、日々の関わりの中で自然に示してくれている。

ある日の授業、一人の先生が子どもたちに手話で語りかけた。「イヨは髪や肌の色が違うが私たちは同じ人間だ。違いを理由に差別をしてはいけない。私たちは神様がつくった家族なのだ」と。子どもたちは大きくうなずき、最後には自然と互いに抱き合った。

一人のマイノリティーだからこそ、この場所での出会いや関わりが、違いを越えて共に生きる意味を教えてくれる。言葉が通じなくても、同じ空間で同じ動きを共有すれば人はつながることができる。その思いを胸に、今後も目の前の人と向き合い続けていきたい。

ろう学校の授業で子どもと触れ合う筆者（右から3人目）